
玲ちゃんの幽霊教室

鳴瀬るな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

玲ちゃんの幽霊教室

【Zコード】

Z7660S

【作者名】

鳴瀬るな

【あらすじ】

長年1年B組に地縛霊として住み続ける高校生の玲ちゃんは、いつかクラスメイトに気づいてもらえることを信じてひつそりと学生生活を送っています。黒髪の似合うかわいい女の子なのですが勘違いが激しく、キレると即、人殺しを働いてしまうという大きな欠点が。とばっかりを受けるクラスメイトは増加の一方をたどり……。この女子高生、最凶です。

玲ちゃんの表裏

みなさんこんにちは。

この度は私なんぞのお話に触れていただき誠にありがとうございます。

初対面の私に興味を持つていただけたうえに少しだけ自己紹介をさせてくださいね。

私の名前は玲です。黒髪の似合つ女の子。気軽に玲ちゃんって呼んでください。

年齢は16歳の高校1年生で、住まつてはまつと暮らしていんですけど……1年B組の教室です。

勘のいい方は薄々気づいていらっしゃる」と思いますが、実は私、60年前に……。

死んでるんです。

それからはいわゆる地縛霊として毎日を過ごしてこます。馬鹿にしちゃダメですからね。ちゃんと国語辞典にも記載されている立派な霊なんですよ？

このお話は1年B組に地縛霊として住み続ける私の日々を綴った日記です。

今後ともよろしくお願ひしますね。
かまつてくれなきや呪い殺しちゃうわ。むふ。

秋吉先生の絶命

おはようございます。

私の一日は賑やかな声とともに始まります。お寝坊さんなのは重々承知ですが、クラスメイトたちがホームルームを始める時間が私の起床時間なんです。世にも珍しい寝起きですね。

「出席を取ります」

私は先生の声が聞こえたので寝床にしている掃除ロッカーから静かにします。あまり大きな音を立ててしまうとみなさんびっくりしてしまうので厳重な注意が必要です。この前なんて転んで音を立てしまったばかりに、斎藤君に除霊と称して寝床にクレンザーを掛けられました。そんなもので私は消えません。やめてください。へこみます。

「石崎」

「はい」

先生の出欠は何事もなく進んでいきます。私も後方の一つぼっかり空いている席に着席してぼんやりみんなの名前が呼ばれるのを待ちます。

「北川」

「はあーー」

私の姿は誰にも見えません。幽霊なので当然と言えば当然なのですがときどき寂しく思つこともあります。

「矢沢」

「はいー。」

どうやら今日も私の名前が呼ばれる様子はありません。60年間待ち続けていますが誰も私の名前を呼びません。みなさんが羨ましいです。私だけ自分の名前を呼んでもらえるように努力してますですよ?

黒板の日直の欄に自分の名前を記入してみたり、学級日誌に私が夜な夜な掃除をがんばっているって報告したり、みなさんが習字で書いた『夢』や『希望』を教室の後方に貼り出している中、私だけ『玲』と自分の名前を貼り出してみたり。いつか私の努力が報われる日は来るのでしょうか?

「出欠は以上だな。それから……今日のホームルームは少しみんなに聞きたいことがある」

先生はあえてもつたいたぶつたような言い方をしました。何か事件が起きたのでしょうか。

「実は先生、とても悲しいんだ。何度も言つてるが黒板に『玲』なんて存在しない人間の名前をいたずら書きするのはやめよ。おまえたちだって高校生だ。いつまでも中学生じゃないだろ? ほら、書いたやつは前に出て来い。今出でくれば先生許してやるから」

気づくと私は席を飛び出して秋吉を黒板に押し付けていた。瞬時、秋吉は不可解な感触に動搖した様子を見せたが、そんなことはどう

でもいい。十秒後におまえは氣絶してるんだから。

徐々に、徐々に、手のひらから力を込めて指先に重みを送る。空いている手で秋吉の喉元に手をあてがうと、痰の詰まったような声にならない声を漏らしながら必死にもがき苦しみ始めた。

何が起きているかわからないクラスメイト達は泣き叫ぶが、その悲鳴を声援代わりにボルテージの高まつた私の両手は確実に喉を押し潰し、ゴリゴリと秋吉の喉仏を削り落とす。

『誰の名前も呼べなくしてあげる』

呼吸困難になつた秋吉が崩れ落ちると、私は喉を口がけて拳を幾度となく振り下ろした。壊れた人形のように頭部が左右に揺れて、砕け散つた骨が傷口から恥ずかそうにちらりと覗く。ああ、骨の碎ける感触と素敵な音色が最高。極上の人骨オーケストラ。思わず笑みがこぼれちゃう。むふ。

本日の犠牲者、秋吉先生。

みなさんにはお仕事がありますか？

残念ながら私にはありません。クラスには黒板に書かれた文字を消す黒板係や、習字の用紙などを教室に貼る掲示係など多種多様なお仕事があるのですが、私は60年間仕事を任せられていません。ちなみに最後に任せていたお仕事は、米軍の戦闘機であるB29が空に見えた時にクラスメイトを防空壕に先導するというものでした。結局私だけ逃げ遅れてしまいましたけど……。あつ、ここ笑つて大丈夫なところですよ。

でもでも長年のブランクがあるとはいえ私も1年B組の一員なのですから一度くらい何かお仕事をさせて頂きたいのです。あわよくば学級委員長に……なんて、そんなひたむきな情熱だめですか？

突然の転機が訪れたのは私が有り余る情熱を持って余していた時のことでした。

きっかけは教壇に立った秋吉先生の一言です。

「ふがふがふが（今日は係決めをします）」

先生は『ふがふが』言いながらフリップに文字を書いて説明しています。かわいそうに。風邪気味で喉を悪くされたのですね。先生という職業は健康が資本です。お大事になさってください。

ですが！ 今注すべき点はそこではありません。なんと待望の係決めが始まるではありませんか。これはもしかしたら、もしかすると、私にも何かお仕事をさせていただける可能性があるのでないかと、淡い希望を抱いてなりません。

「ふがふがふが（『ミミ捨て係は、田中）』

先生の指示により、楽なよう意外と面倒な『ミミ捨て係は田中くんに決ましたよ』です。おめでとうございます。私は心中で拍手を送りました。

他の方も同様に自分のなすべき係が決まっていきます。

「ふがふがふが（生物係は、安井）」

おめでとう『れいこ』ます安井さん。いつもかいがいしく金魚の『デメちゃん』のお世話をしているのが実を結びましたね。

「ふがふがふが（連絡係は、葦澤）」

おめでとうです葦澤さん。激務かと思いますが責任感の強い葦澤さんならきっと大丈夫。いつも応援していますよ。

「ふがふがふが（掲示係は、内籠）」

よかつたね内籠くん。背の高いあなたにはぴったりなお仕事かと思います。

「ふがふがふが（係は残すは一つだな）」

恐ろしい真実が告知され、私の額にはしつとりと汗が浮かびます。やりたかった給食の配膳係も既に決定してしまいましたし、残っているのは長年私が憧れ続けた学級委員長の役職です。私が委員長になつた暁には人間と幽霊の差別をなくしてみんなで仲良く学校生活が送れるように身を粉にして働かせていただくつもりです。つまり学校から社会を変えるのが私のマニフェストなのです！

だから……。

だからお願ひ……。

私を委員長に推薦してください！

「ふがふがふが（委員長は当然、松島だな）」

我に返つた瞬間、私は松島の頭部を机に叩きつけていた。何百往復も繰り返し叩きつけていると次第に机の中央が大きく歪み、あたり一面血まみれに。私は出血の原因が松島の薄汚い口にあることがわかると、一度と血が吐けないよう冴袋にチョークを山ほど押し込む。だらしなく涎を溢しながら白目を剥く松島がとても面白くて、さらにチョークを詰め込めば白目が一周して黒目になるんじゃないかつて期待値大の興奮度マックス。直腸まで流し込んでやるよ。黑白黑白黑白。スロットみたい。

『おまえさえいなければ』

一本、また一本、今度はめんどうだから五本一気に。

『おまえさえいなければ』

青色チョーク、黄色チョーク、赤色チョーク、女の子らしくカラフルに。

本日の犠牲者、松島かえで。

芦屋ぐとの減量

みなさんには憂鬱な学校行事がありますか？

運動会、合唱コンクール、授業参観などなど、学校にはたくさん行事で溢れていますよね。どれもこれも魅力的ではありますが、人によっては窮屈に感じる事もあると思います。60年以上も学校に居座っている私にも苦手な行事があるのでから、みなさんは尚更ですね？

少し前置きが長くなってしましました。

今日は、

身体測定の日。

そうなんです。身体測定。これが私どつしても苦手なんです。やはり体重が増えていたらショックですし。もちろん私だって女の子なので体重や身長には敏感で、今日のために一週間前から生水しか口にしません。普段の主食は秘密ですよ。絶対に。それでもどうしても知りたいのであれば、19時に家庭科室にいらしてください。たいしたものは用意できませんけど、精一杯おもてなしますから。むふ。

「では女子から名前の順に保健室に入つてください」

保健室の佳子先生が言いました。先生は体も細くて、綺麗に整つた顔立ちをされてるので白衣も良くお似合いです。男子たちの人気が集中するのもわかる気がします。別に悔しくないですよ。私だけいつか成長すれば佳子先生みたいな素敵な女性に……。

私は名前の順に並んで自分の順番が回つてくるのを待ちます。私の名前はご存知のとおり『玲れい』なので女子では一番最後なんです。これが名前の宿命ですから今更どうということはないんですけどね。前に並ぶ理崎さんが緊張している私に話しかけてくださいました。

「早く順番回つてこないかなあ」

せつからく理崎さんが喋りかけてくれたので、私も声をかけます。

『理崎さんは確か……運動部でしたよね?』

「眠い」

『睡眠不足ですか? お大事になさつてくださいね』

「あつ、次私の番だ」

少し噛み合わないお話をお互に済ませると、理崎さんは白いカーテンの向こう側に消えてしまいました。身体測定はカーテンを仕切りにして一人ずつ行うので男子に見られてしまう心配もありません。確かに……私の次は芦屋くんだったかと思います。あまりお待たせするのも申し訳ないので恥ずかしがらずに手際よく進めた方がいいですね。

理崎さんがカーテンから出てこなければ戻つてくると、入れ違いに急いで入室しました。

室内には佳子先生一人。診断表らしき用紙に個人情報を記入しています。

はらり。

私は制服を脱ぎ捨てました。

もしこんな姿を男子に見られようものならお嫁にいけません。

まずは身長測定でしょつか、それとも体重測定？

悩んでいた私に対し、佳子先生は振り返って言います。

「よし、女子は終わり。早く男子入ってきてください」

「はい！ 芦屋です。今行きます！」

芦屋くんの返事が聞こえたと思ったのもつかの間、カーテンが気持ちのよい音を立てて開きました。

『乙女の貞操が……奪われる……』

気がつくと私は鉢合わせしてしまった強姦魔（芦屋）に大量のエタノール液を飲ませていた。悪魔。悪魔。悪魔。おまえは乙女の心を踏みにじる悪魔だ。

『見られた……私の下着姿……お気に入りの……』

怒りに震える私は薬品棚からエタノールを補充すると、オロナミンC感覚で芦屋に吸引させる。謎の超常現象に見舞われた芦屋の体は棚に直撃し、崩れ落ちるようにパイプ椅子に着席した。バブ玲ちゃんに「名様」案内。今日は私のおごりだから遠慮せずに飲めよ。しかし私の好意を受け入れない芦屋は口に含んだエタノールを何度も吐き返す。私のエタノールが飲めないっていうのかよこの野郎。もつと一気に、もつと豪快に飲め飲めエタノールを。戦時中じや高级酒だぞ。

芦屋が気絶して無抵抗になつたのが認識できると、次に髪の毛を掴んで引きずり回す。お客様お帰りですか？ だが砲丸投げの容量

で乱暴に振り回していると何かが千切れる音がした。頭？ 腕？ 足？ どっちでもいいや。どのみち全部もぎ取つてやるんだからさあ。

私は近くにあつたダンベルを手に取ると芦屋の頭蓋骨を粉碎して脳内を探る。その間0.02秒。躊躇はない。標的は記憶領域である海馬。ハツ裂きにして私の下着姿どころか自分が人間であることも忘れさせてやるよ。

『どこだあ……記憶領域はどこだあ……』

ぬちより、ぬちより、と指先で泥遊びをしているかのように脳内をまさぐる。しかし血液が大量に吹き出し、脳内一面真っ赤で何も見えない。仕方ないか。私は近くにあつたボールペンを手に取ると狙いを定めて芦屋の脳に突き刺……。

本田の犠牲者、芦屋勇樹

古屋べこの減量（後書き）

今日もLet's バイオレンス

みなさんには胸をときめかせる想い人がいますか？

高校生ともなると素敵な異性に出会うことだと思います。眠れない夜に恋文を書き綴つて想いを馳せている方もいるでしょうし、もしかしたら既にお付き合いされている方もいらっしゃるかもしません。恋は女の子を美しくします。私も例外ではありません。

ですが！！

将来の伴侶に絶大な愛情を注ぐためにも結婚するまでは貞操を守るべきことだと思います。今、『半世紀前の思考だろ』と言った方、夜道に気を付けてくださいね。私はいつもみなさんを見ていますよ。むふ。

そしてとても残念なことです先日、危うく私の貞操が奪われそうになるという恐ろしい事件が起きました。やはりクラスメイト同士でこのような事件が起きるのはとても悲しいことです。それでも私は『強姦未遂の責任を感じて転校してしまった芦屋くん』を許してさしあげようと思います。誰にでも若氣の過ちはありますから。再びお会いした時は笑つて言いましょう、あの頃は若かつたね、と。

さて、いつもながら長い前置きで申し訳ありません。

現在お昼休みなのですが、高橋くんと鈴木くんが何やらお話をしているようです。

「かわいくないけど人間なのと、かわいいけど幽霊、どっちかとヤルんだつたらどっちがいい？」

お昼から気が滅入るよつた破廉恥なお話ですね。お一人は「」に女子がいるのを忘れているのでしょうか。

そんな私の気持ちもお構いなしに高橋くんの質問に鈴木くんが答えます。

「つーん、微妙だけど幽霊かな。とりあえずかわいけりゃヤれるだろ？」

私は急いで教室にある鏡で自分の姿を確認します。

目、鼻、口、足、手、全て。
どうみても……。
間違いない……。
私は……。

かわいい！！

つてことはです。

『貞操が奪われる！』

ヤラれる前に殺ることを決意した私は近くにあつた掃除用のモップを手に取ると鈴木の心臓を狙つて……その瞬間ふと、最近起きた出来事を思い返します。

私も心を広く持ち、相手を許してさしあげましょ。いつの日でしたか、クラスメイトの矢沢さんが高校生の男子はみなさんそういうものだとおっしゃつていてのを盗み聞き……いえ、お喋りしたことがあります。断じてお喋りですから。誰にも相手にされず立つていたわけじゃありませんから！ 友達いますから。本当です。うう。

「俺は言つたぜ。高橋はどうなんだよ？」

「俺か？ 俺は幽霊とか無理だわ。ほんと気持ち悪いだろ。なんか暗くてじめーっとしててさ。いくら可愛くても無理無理無理。千回言えるぜ。絶対無理！」

いつの間にか右手に持つ掃除用モップは高橋の額に突き刺さつて壁まで貫通していた。後頭部から溢れた血はモップの柄を伝つて習字の時間に高橋の書いた『希望』を赤で侵食してゆく。ついでに鈴木も突き刺してやろうかと心の中の悪魔が囁いたが、鈴木は既に友人の額が突然貫通したことに驚いて気絶していた。根性無しが。今度目があつたら走行中の自転車の車輪に指を入れてやるからな。覚えとけよ。

次第に血が固まりモップが動かなくなると、ぐりぐり抉るようにして引き抜いた。だが面白いことを思いついた私はモップを再び高橋に突き刺し、引きずつたまま廊下を歩き始める。生前からペットと散歩してみたいという願望のあつた私の心は希望の叶つたことに満足感で溢れた。

『乙女心のわからない男に死を……』

ずるずるずるずる……。

『乙女心のわからない男に死を……』

ずるずるずるずる……。

私は高橋をモップに突き刺したまま屋上の時計台にたどり着くと、時計の長針を引き抜き、代わりに串刺しなった高橋を取り付ける。すると即時、昼休みの終了時間である1時を高橋がお知らせした。

晴天の空から赤色の雨が降る。

本日の犠牲者、高橋俊太

高橋くつの貫通（後書き）

今日もGOーGOー バイオレンス

みなさんには大切なお友達がいますか？

私には1年B組のみなさんという宝物のような素敵なお友達がたくさんいます。あつ、もちろん今これを読んでくださっているみなさんも大切なお友達ですよ。いつも私にかまつてくださつてありがとうございますとうござります。いつか一緒に駅前のケーキバイキングに行きましょう。お好きなケーキは何ですか？ 身体測定も終わったので楽しみですね。むふ。

今回はクラスメイトで私の親友の常盤さんのお話です。

「あれ？ 今日も入つてる」

早朝、常盤さんは自分の席に着いて机の中を調べると言いました。手にしているのは白色の交換日記です。

何を隠そう実は、私と常盤さんは交換日記をする仲なんです。昨日あつたあれこれや、互いに想つあの方のこと、家族のことまで、全てにおいて包み隠さず共有しているんです。高校生にもなつて、なんて馬鹿にしちゃ嫌ですよ？ あまり私をいじめるとB29の爆撃がどれほど熱くて苦しかったのかを寝床についたあなたの耳元で朝まで語り続けますからね。なんて……冗談です。怖がらせちゃつてごめんなさい。

「いつもいつも誰のイタズラだろ？」

常盤さんの笑顔を想い浮かべて書き綴つた私とは裏腹に、常盤さんは困惑の表情で手にした交換日記をパラパラと雑に開いて眺めています。次第に近くにいた矢沢さんも興味深そうに交換日記を覗き

「みました。

「ねえねえ、なにそれ？ ちょっと読んでみてよ」

「うん。いいよ」

悲しいことに常盤さんが裏切りました。一人の秘密であるはずの交換日記を読まれてしまうことに、私の心は地獄の一一番街の釜ゆでの刑に使われる釜の底よりも深く傷つきます。持っていた鉛筆がメキメキと音を立てて割れました。

「読むね。4月25日……常盤さんは学校に着くと窓の外を13秒間眺めてから黒板で今日の日直を確認した……矢沢さんが苦手な常盤さんは日直が矢沢さんであることがわかると舌打ちしてからトイレに向かう……3分以上も2番目のトイレから出てこない……心配になつた私はドアをよじ登つて上の隙間から常盤さんの姿を確認……いた、どうやら調子が悪いみたい……今朝食べた三日田のカレーが悪かつたんだね……お大事にしてね……以上。……って、え？ なにこれ！？ なんでそんなことまで知つてるの？ 誰？ 誰が書いたの？ キモイんだよ！ 早く出てこい！ ストーカーやらう！」

閉じていた瞳を開いた瞬間、私は常盤の右腕を引っこ抜いていた。ブチッと轟音が教室にこだましたのと同時に白の交換日記が赤に染まる。私は持っていた右腕を「ミニ箱に投げ捨てると、常盤の両頬を付かんで私たちの関係を言葉にさせる。

「れ、い、ちや、ん、は、わ、た、し、の、し、ん、ゆ、う」

極限まで伸びた頬から手を離すと、常盤は泣きわめきながら口にさせられた事実を否定し始めた。

「ちがつ、私そんなこと言つてない。玲なんて知らないもん！ 悪靈退散！ 南妙法蓮！ 南無阿弥陀仏！ 臨兵闘者皆陣列在前！」

まだ言つか……。

その口がまだ言つか……。

もつとお仕置きが必要だな……。

私は余つていた常盤の左腕をさつきよりも豪快に引き抜くと、校庭をウロウロ徘徊していた犬に朝食として投げつけた。普段は目を丸くしていて生徒に可愛がられている犬の目が野生に変わる。突然訪れた幸運に始めは匂いを嗅いで疑っていたが、それが食べ物であることがわかるとすぐに飛びついた。牙をむき出しにしながら人肉を貪る犬が愛おしい。

『裏切り者の…… まづい肉で…… ごめんね』

もつと、もつと、たくさん欲しいと求める犬に、血まみれで意識を失っている常盤本体を投げつけた。

本田の犠牲者、常盤由美

常盤さんの栄養（後書き）

作者は普通の人ですよ

読者さまの休息（前書き）

ついに玲ちゃんの魔の手は読者様に……。

「んにちは。お待たせしてすいません。

駅前のケーキバイキング、ちゃんと覚えていてくださつてとっても嬉しいです。あなたは常盤さんとは違つて約束を守られるので素敵な方だと思います。そして1年B組以外の方とも親交を深めたいという私の気持ちを酌んでこのような場を設けてくださつたことに感謝しています。なんて……少し他人行儀ですね。私たちはもう友達なんですから。あつ、ありがとうでも……いい……ですよね？

そうそう、あなたも遠慮しないで気軽に玲ちゃんつて呼んでくださいね？

一緒に行きたいと思つていたケーキ屋さんはここからすぐなので、お喋りしながら仲良く歩きましょ。

それにして、あなたはお洒落さんなんですね。私なんて60年前の古いデザインなので流行りのファッショントピックと着こなしているあなたが羨ましいです。尊敬します。確かに……音楽は最近『れでーがが』や『ばんぶおぶちっさん』が人気と聞きました。今度私にも聞かせてくださいね？

あつ、着きました。ここです。この『ミルフル』というケーキ屋さんです。あなたとお喋りしていると時間が経つのが早く感じます。一緒に登れば富士山の山頂まで一時間で着くかも……なんちやつて。ねつ、早く入りましょう。

「一名様ですか？」

のつけから失礼な店員さんですね。あなたしか見えていないので当然と言えば当然なのですが。そうそう、私の言葉は店員さんには聞こえないのあなたから一一名様とお伝えください。

「えーと、お連れ様はあとからいらっしゃいますか？」

しつこい店員さんですね。力になれずにごめんなさい。全てあなたにお任せします。もうひと押しですよ。がんばってください。

「わかりました。一一名様でよろしくんですね？」

やりましたね！ 店員さんが折れてくれました。不信感いっぱいの皿で見られてしまいましたが、バイキングの恥はかき捨てです！ あれ？ 顔が真っ赤じゃないですか！ うう……「ごめんなさい。でもこれで一緒にいっぱいケーキが食べれますね。早くお皿を持ってケーキを獲得しましょう？」

ミルフィーユに、チーズケーキ、チョコレートケーキはもちろんですし、ショートケーキは絶対に外せませんよね。

おおっ！ あなたも結構お皿に盛りましたね。今の私、すっごく興奮しています。これがいわゆる『ハイテンション』というやつですか？ むふ。よだれがあ、よだれがあ、止まりません！ とても幸せです。一緒に座つて食べましょう。はい、フォークも忘れずに。

あれ？ どうかしました？ 突然黙つてしまわれましたけど……。やつぱり私みたいな人とお食事するのは恥ずかしいですか？

そうですよね。周りの方から見れば独り言を言いながら一人でケーキバイキングしているように見えますものね。しかも一一名様で入店していますし。このままでは大切なお友達であるあなたがスタッ

フルームのネタにされてしまいします。うう……。私が幽霊じゃなかつたらあなたに恥ずかしい思いをさせずに済んだのに……。

あつ、いいこと思いつきました！

あなたが恥ずかしい思いをしなくて済むには……。

『おまえも幽霊になればいい』

私はフォークを逆手で持つと、あなたの眼球を一突きした。

本日の犠牲者、あなた

読者からの休憩（後書き）

どなたをターゲットに執筆しているのか自分でもわかりません（笑）
はたして玲ちゃんの幽霊教室は続くのでしょうか。

恋人たちの盲目

みなさん休日をどのように過ごしますか？

お友達と青春を謳歌されている方もいれば、お付き合いされている方と街へ繰り出す方もいるでしょう。また、少し寂しい気もしますが一日を何もせずに過ごしてしまい氣づいたら6時半、国民的家族アニメが始まってしまい、迫りくる明日に憂鬱な気分になる方も多々いらっしゃることと思います。ですが怖がらなくとも大丈夫。私はいつでもみんなさんの味方ですよ？ 嫌なことがあつたら何でも言つてくださいね。

ではではいつもの前置きはこの程度にして本題に入りましょう。今現在、私は1年B組の教室のベランダからぼんやりと夜空に浮かぶ星を眺めていました。辺りはすっかり暗くなつており、校舎にも明りは灯つていません。そのおかげ……とでも言つのでしょうか、星は煌々と輝きを保ちます。

いつも星空を眺めると、ふとこんなことを想つのです。

同じ空襲にあつたトメちゃんは元氣にしているかな？

この時ばかりはお星様になつていいないことを願うばかりです。どんなに美しい星よりも、生を持つ人間の輝きの方が遙かに美しいのですから。私は本当にそう思いますよ。でもです、もしトメちゃんがお星様になつていてるなら、人間に負けないほど輝いて私たちを照らして欲しいとも思うのです。ふふつ、矛盾してますね。いつか私もみなさんを照らすことができたら……。

「めんなさい。少し哀愁に浸つてしましました。今日はただ、みんなにこのベランダから見える星の美しさを伝えたかつただけな

んですけど、すぐに湿っぽくなつてしまつのは私の悪い癖ですね。むふつ、今湿っぽいと幽霊を掛けたんですよ。気づきました？ どうぞどうぞ笑つてください……って、あれ？ 何やら校庭の方からカツプルの声が聞こえますね。今日は休日です。こんな夜中にどうしたのでしょうか。耳を澄ませてみましょ。

「ねえ、ほんとにいいのかなあ？」

「今さらビビつてんのか？ ここに来たいつて言つたのは藍子だろ？」

よくよく姿を見ますと、私の見覚えのある方たちです。同じクラスメイトの徳永くんと岡部さん。お一人はお付き合いでされていたのですね。これぞ青春の謳歌。羨ましくなっちゃいます。それにしてもこんな夜中に学校で……最近の高校生は進んでいますね。見ているにつづちが恥ずかしくなつてしまいそうです。

「私なんかすつごく寒くなつてきた。絶対ここには良くない霊がいるよ。性格が曲がつてて、血を好んでて、恨み妬み嫉みの激しい霊。そんな幽霊がいそうな気がする」

「はあ？ なんだよそれ。俺たち毎日ここに通つてるだろ。大丈夫、大丈夫。マジで幽霊出てきたら俺の右フックでKOしてやつから！」

私は右手に掃除用モップ、左手に椅子を持つと、三階のベランダから飛び降りた。向かう先は不届き者の待つ場所。着地に成功。風のよつた速度で標的との間合いを詰めると、まずは自称ボクシング経験アリの徳永にモップを一振りした。柄が刀の如く鋭い切れ味を發揮し、スパッと頭部が首から落ちる。メインディスプレイを失つた徳永本体はしばらく両手両足をうねうね動かしていたが、そこに

意思はない。じきに悪臭を放つ生ごみになるだらう。もろに血のシヤワーを浴びた岡部も当然慌てふためいたが、2秒後に沈黙。私は岡部を串刺しにした椅子に座りながら意識が回復するのを待つ。

『誰の性格が……悪いって？』

意識を取り戻した岡部は自分の体に椅子が刺さっていること気がつくと発狂し、深い闇に落ちた。

本日の犠牲者、徳永健一、岡部藍子

恋人たちの盲目（後書き）

玲ちゃんとバーチャルデートの方が面白い気が……。
殺りたいことを一通り殺つたら完結しますね
いつも読んでくださつてありがとうございます。

みなさんには好きな授業がありますか？

国語に数学、英語や体育など日々たくさん授業に触れていますが、私は家庭科の授業がとっても楽しいので一番好きです。時にはお料理を、時には裁縫をしながらいつか自分が嫁ぐことを想像すると気持ちが高ぶりますね。その時のために花嫁修業は欠かしません。旦那さんのお世話をさせて頂き、こどもに胸いっぱいの愛情を注ぐ……そんな将来の目標ってダメですか？

本日もご静聴ありがとうございました。今回のお話は家庭科の授業中に起きた出来事です。

「では、怪我の無いように気をつけてはじめてください」

先生の掛け声を皮切りに、作りかけのブラウスの制作を開始します。

私は裁縫道具を持ち合わせていないので、いつもお隣の北川さんのをお借りしています。いつもありがとうございます。それにしてもみんなのブラウスのデザインは色とりどりで華やかですね。横文字は苦手なので意味はよくわかりませんが、音楽好きの安井さんなんて『FUCHIK』と書いてある刺繡をブラウスに縫いこんでいます。ですが、私のブラウスときたらみなさんのと比べたら地味な灰色のデザインです。これがジェネレーションギャップというやつなのでしょうか？なんて……みんなの作品ばかりに気を取られていてはいけませんね。私も遅れを取らないように一生懸命やらなければ。

そう思ったのもつかの間、突然北川さんの声が聞こえました。

「あれ？ 一番小さい針がない……」

なんということでしょう！ 私としたことが大変迷惑なことをしてしまいました。針をお借りしたばかりに北川さんが困ってしまったようです。怒られてしまう前に北川さんの裁縫道具にお借りして、いた針をお返します。ですが、その代わりに太い針をお借りしますね。てへ。

このブラウスが完成した暁には、せっかくなので授業参観の日に着用したいと思っています。たくさんの保護者様がいらっしゃいますからね。出来る限り綺麗な装いで迎えてさしあげます。

そうそう、保護者様は何故あのような強い香りを発せられているのでしょうか？ 授業参観の日には必ずと言つていいほど鼻をくすぐる強い香りが教室に充満します。残念ながら得意な香りではないので少し抑えて頂けるとありがたいのですが……と、また授業に集中せずにこんなことばかり考えてしまつて。しっかりとブラウス制作に集中しなければいけませんね。

自分を戒めてから、改めて布に針を当てる時のことでした。

「あれ？ 今度は太い針がない……」

辺りをきょろきょろと伺う北川さん。ビックや、私はまたも北川さんに迷惑を掛けてしまつたようですね。

「もういいかげんにしてよ！ 誰がイタズラしてるのー？」

北川さんの怒りは頂点に達しました。

本当に申し訳ありません。

そんなにブラウスが欲しいのでしたら……。

『直接体に縫いつけてあげる……』

瞬間、私は針をせがむ北川の手のひらに彫刻刀を突き刺していた。甲高い悲鳴が教室中にこだまするが、そんなことにはかまわず最後まで貫通していなかつたそれを力を込めて押し当てる。ブツツと最後の皮が破ける音が聞こえた時には北川はぐつたりしていた。投げつけるようにしてブラウスの生地を掛ける。

『太い針と小さい針……どっちがいい?』

返事がないことを両方使ってほしいの意であると受け取った私は右手に小さい針、左手に太い針を持つと、裁縫に取りかかった。生地に針を通すときは楽でいいが、北川の肌は少し硬い。貫通するたびにブチブチ不快な音をたてやがる。溢れた血のせいでブラウスまで赤く汚してしまうだろ。

それでも私は、北川の目が覚めたときの表情を想像して針を通し続ける。

北川の肌。
ブラウスの生地。
北川の肌。
ブラウスの生地。
北川の肌。
ブラウスの生地。
北川の肌。
交互に、リズミカルに、永遠と。

本日の犠牲者、北川沙希

1年A組の静寂

みなさんはお出かけするのは好きですか？

ちょっとしたお散歩から、遠く離れた温泉旅行、海外にまで足を延ばす活発な方もいらっしゃることと思います。楽しみであればあるほど前田はドキドキしてなかなか寝付けないですよね。むふつ、何を隠そう私もそうなんです。昨日は日が冴えてしまって簡単に寝ることできませんでした。何故なら今日は……。

課外学習の日。

はい、待ちに待った課外学習が行われるのです！

「あと十分ほどでサービスエリアに到着します。トイレに行きたい人は必ず寄るようにしてください」

引率の先生が言いました。今、私たちは大型バスの車内で高速道を走っています。とても速いスピードなので、間違つて運転士さんの腕をクイッと引っ張つたら大変なことが起きてしまいそうですね。ふふつ、大丈夫です。私だってやつてはいけないことくらいわかっていますよ？

そうそう、今回は私を含めた1年B組のバスと、お隣のクラスである1年A組のバスの二台で目的地に向かっているんです。普段からライバル意識の強いA組とB組ですから、目的地に向かう車内でもこのようなことが起こります。

「よしつ！ A組を抜いたぞ」

並走していたA組を追い抜いたことで隣の席に座る石崎君が喜びの声をあげました。私たちは高校生なのですが……たまには童心に

帰つてこのように一喜一憂するのも楽しいですね。もちろん私もB組なのでB組の勝利を願っています。どっちが先にサービスエリアに到着することができるでしょうか。ガンバレガンバレB組！

「ちくしょうつ！ またA組が迫つてきた！」

石崎君のみならず、追い上げを見せるA組の脅威にみなさんがザワザワと窓の外を覗きこみました。

運転手さんも変な敵意があるのでしょうか、A組を突き放すべく心なしかスピードを上げます。

そのおかげで……。

「おっ、大丈夫だつたか……」

自分たちのバスがスピードを上げたことで石崎君は安堵のため息をつきました。

つと見せかけて！

「くそうつ！ あいつらしつこいな！」

A組もB組に勝るスピードで迫つてきました。

非常にまずいです……。

このままでは……。

『……A組に負ける……』

仲間意識の強い私は、気がついたらバスの窓からダイブしてA組のバスにしがみついていた。運転手は靈感が強いのだろうか、突然フロントガラスに私が飛び乗ったことに驚愕した。からうじて意識を保つ運転手に、私はフロントガラスを割るような強さで叩く。

ドンドンドンドンドンドンドンドンドンド。

「ひいやあああああ
！」

目的、撃沈。

トンネルに差し掛かるところでA組のバスは横転し、他車をなぎ倒すようにして衝突。そのまま炎上し、数秒後に爆破音が聞こえると、すぐさま大破。数分前まで並走する私たちに手を振つて挑発していた者はこれで全て片付いた。私を侮るな。地獄で後悔するがいい。

本日の犠牲者、栗原先生、青木梨乃、伊藤拓実、上原啓太、江口瑞樹、大田智也、岡本三咲、香川翼、加藤あかり、北村大樹、児島勇人、斎藤真奈美、酒井菜穂、柴田優、関根隆平、棚橋誠、千葉一寿、土屋綾香、遠山真央、長尾大地、野際龍之介、早川結衣、原田幸平、樋川里菜、本間涼、松坂美羽、三木蓮斗、望月祐子、森圭吾、柳瀬茜、結城健介、吉岡直道（運転手）

1年A組の静寂（後書き）

玲ちゃんの幽霊教室は「メティー」です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7660s/>

玲ちゃんの幽霊教室

2011年5月11日15時16分発行